

吉備国際大学研究紀要
 (人文・社会科学系)
 第23号, 95-104, 2013

言語と生物の類似性に関する考察

平見 勇雄

A Study on the Similarities between Language and Creature

Isao HIRAMI

Abstract

Creature have always developed their own appearances and nature to survive in a special way, and languages also have developed their own characteristics in different ways. There are many parallels between language and creature, and such examples have been seen so far in the previous papers.

The aim of this paper is to add some explanations to them.

Key words : language, creature, similarities

キーワード : 言語, 生物, 類似性

はじめに

人はどの国で生まれてもその国の言葉に触れ、そこに住めば、その国で話される言語を母語として不自由なく話すことから、どの言語にも共通の文法(普遍文法)があるとする考えがある。言語の文法を司る脳の特定の部分が担っているという結論に至るのであるが、これは基本的に文法に関して考えられていることでどんな言語であろうと母語を話す話者はある文が正しいか間違いであるかは文法を習わなくても直感的に判断できる。この直感ほどの言語でも働くことから言語に共通に普遍的な何かがあると言われているが、言語の他の面、たとえば音声に関して言えば、言語によって脳の働く部分が異なってお

り、必ずしも同じ部位だけが使われているわけではない。音素の成り立ちが違っている二つの言語では脳の働く部位が違うことが実験でわかっている。日本語を話す日本人が第二外国語として日本語を話す海外の人に会えば程度の差こそあれ、同様にその発音がネイティブではないことに気付く。その点から考えると文法の面で言語によって性質が大きく異なるなら音声同様、脳の別の部位が司っている可能性も出てくるのではないかと考えられる。言語により文法規則の性質自体が多様であるならば、文法に関わっている部分も違う可能性も捨てきれないからである。別の可能性として、音声面は言語により違う部位が関わっているのとは正反対に、文法に関して脳の共通の部分が司っていたとしても、全く別のメ

吉備国際大学文化財学部アニメーション文化学科
 〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町8

*Department of Animation Culture, School of Cultural Properties, KIBI International University
 8, Igamachi, Takahashi, Okayama, Japan (716-8508)*

カニズムをこなす能力があり、あたかも共通の普遍性があるという錯覚を作り出していることも否定できない。同じ部位ではあっても別の働きを担える可能性もある。これまでの研究から、音楽と言語は共通した部位がかかわっており譜面を読む行為と言語を使う部分とは同じ部分が司っているからである。

言語という、誰もが話す行為に、違う脳の部位が関わっていることと同列には論じられないが、生物に共通する睡眠のような生物活動においても生物間に対応する同じ脳の部位が睡眠をコントロールしているわけではない。同じ特徴が見られるといえども生物によって違う脳の部位が担当している事実のあることから、以上の仮定は一つの可能性を残していると言える。言語が階層的な構造をしているということ、コンピューターによる言語と我々の話している言語は似て非なるものであることも途中に挟みながら、引き続き言語と生物の類似性を考えてみたい。また意味と形式の対応関係が見られない例が存在するという、認知言語学的な視点から問題になっている側面は言語の変化を次の段階に進ませるために必要なもの、すなわち生物が姿を変えて進化してきたことと同様のメカニズムがあるのではないかとの視点から言語を考え、言語がダイナミックな動的平衡の性格を持っていることを改めて指摘したい。

1 階層的構造という類似点

人間の言語が他の動物の言語と異なっている特徴として挙げられるのが言葉が階層的な構造になっているという点である。これに関してはスタンレー・コレンが犬の言語、すなわち犬のコミュニケーションにおいて似たところがあると指摘しているが(2002: 318-328)、この構造こそが人間の言語を複雑で多様なものにし、人間の言語たる所以であると言える。言語が階層的な構造をしていることは生成文法では樹形図を使ってしばしば表されるが、複

文と言われるものは主文に一つの文章が埋め込まれている。たとえばJohn knows that Mary knows Lucy. という文のthat以下は一つの独立した意味を持つ文で、さらにLucyをthat Lucy hit Paul.と変えて文を続けることができる。実際には長い文を処理する能力との兼ね合いからおおざと埋め込まれる文の長さには制限がかかってしまうが、これこそが人間の言語の特徴である。

階層的な面は文に限らない。名詞にも階層的な構造がある。たとえば英語ではa girl of blue eyes in my classはa girl in my class of blue eyesということは出来ない。英語における名詞と形容詞の関係は両者が実質的な関係にあるものほど近い位置に置かれるのが原則である。したがってblue eyesはgirlの属性を意味する語であるため名詞に近い位置に置かれなければならない。英語における語順は日本語と違ってかなり厳密に決まっており、これも一種の階層的と呼べるような存在となっている。(日本語では「青い目をしたクラスの女の子」とも「クラスにいる青い目をした女の子」とも言え語順に特段の制限はない。英語ではthree black dogsとは言えてもblack three dogsとは言えないが、日本語では「三匹の黒い犬」とも「黒い三匹の犬」とも言えることから同様である。形容詞の語順も日本語では比較的自由だが、英語ではかなりきちんと決まっている。ただ階層的という言葉はどう定義するか、どこまで広げるかということも本来はきちんと考えなければならない。)しかし日本語でも冒頭に述べた英語の複文にあたる文や関係代名詞節に当たるような構造(すなわち文と見なせるもの)はあるので階層的な構造を持っていると言える。いずれにせよ階層構造は簡単な規則によって複雑な内容を表すことを可能にし、効率的な成り立ちを許しているのである。

この点に関しては生物も階層的な構造をしていると指摘する人もいる。美宅(2002: 26-27)の内容を以下ほぼそのまま引用すると“複雑な生物の体を

作するために自然がとった設計方針は、階層的に構造をつくるということである。わたしたちの体は、小さな（10マイクロメートル程度の）細胞を積み重ねてできている。わたしたちの体は2メートル弱の大きさがあるが、端から端まで小さな細胞の積み木できている。こうすれば、ひとつの細胞をつくり維持するだけのしくみと、分裂させて細胞を増やすしくみを用意すれば、小さなネズミから大きなゾウにいたるまで、ほとんど同じ命令のセットでできる。実際に、マウスとヒトの遺伝子の数はほとんど変わらない。

体が細胞の積み木によってできているように、細胞もより小さな構造体の積み木できている。細胞の部品は、核酸、タンパク質、糖、脂質などの分子である。ひとつの細胞をつくるのに、数十兆個のタンパク質がつくられる場合もある。しかし、あるタンパク質をつくるのに、そのための特別注文の装置を用意することはない。すべてのタンパク質をつくるのに、同じリボソームという装置を使いまわしているのである。核酸、糖、脂質も同じで、特別の場合を除いて、使いまわしがきく装置を使っている。こうした装置の使いまわしと部品の積み木構造で細胞をつくっていくことには、大きなメリットがある。設計が単純で、そのための情報が最小限ですむからである。…小さな分子をつなげて高分子をつくり、それらの高分子をたくさん組みあわせて細胞をつくる。そして、細胞を積みあげて体をつくる。さらにいえば、個体がたくさん集まって、ひとつの社会をつくっている。単純なルールで非常に複雑なものをつくるのに、もっとも効率的なやり方が、階層的な構造形成であり、生物の体はそのようにしてつくられているのである。”

言語によって呼び方は違っているが（たとえば英語の形容詞は日本語の連体詞、形容詞、形容動詞に当たるという意味で。また両者が完全に重なっているわけではない。）細胞の核酸やタンパク質、糖、

脂質は、名詞、動詞、形容詞や副詞等のごく基本的なものに相当する。そしてこれらを結びつけるものはリボソームに相当する、たとえば英語であれば格や前置詞に当たるものである。生物は、分子をつなげて高分子を作り、それを組み合せて細胞を作り、それを集めて体を作る。言語も名詞、動詞などさまざまな語は分子にあたるアルファベットに相当するものをつなげて接頭辞、接尾辞を作り、それらを組み合せて語をつくり、語を合せて語句を作り、さらにそれらを組み合せて文を作る。そして文を組み合せて段落や一つの作品を作りあげることができるのも、すべて階層的な構造をしているからである。

また実際の生物の生態のあり方を見ると共生に見られるようなあたかも別々の種のもものが一つの組織であるかのように見えるものもあるし、ハチのように一匹一匹個体で存在してもそれぞれの役割がきちんと決まっていて、同じ巣に属するハチは個ではあっても個であることを捨てて、一種の機関に属するかのように生きているように見える種もある。その結びつきの程度は種によって違うがそれは一つのグラデーション（段階的なあり方）をなしているように見える。これは認知言語学に見られるプロトタイプからの拡大とも関連する性質でもある。

言語が効率的な作りになっていることはこれまで述べてきたが（ただしすべてがそうではなく非効率的に見えるものもある。たとえばロシア語やフランス語の形容詞と名詞の性の一致など）、階層的構造における面での成り立ちは生物とずいぶん似ていると言える。

2 言語の意味の性質と生物の性質について

生物と言語は階層的で効率的な面があるということだけが同じなわけではない。あることとあることが似ているというだけなら、我々が日常的に使う比喩表現からわかるようにあらゆることで類似性を見

い出すことができる。(一般に比喩というものはあることにおいて理解している部分を借りて理解しにくい別のことを理解するために使われる。したがって二つの間に似た共通の部分を捜し出して我々はしばしば物事を言語化しているのである。) 生物と言語の類似性で重要なことは言語の自動翻訳の難しさが直面している問題の性質を考えるとわかりやすい。すなわち、人間の言葉というのは機械で処理できるような単なる記号とは違う性格を持っているということである。たとえば翻訳という作業は単語の置き換えと文法の組み換えだけでは済まない面が多い。石川(2012:37)は日本語で使われる表現の「窓から顔を出す」という文が、英語では日本語の顔にあたる語がheadで表現されないといけないという、常識的な判断が必要である例やコンピューターが指示語の指示先を特定することが難しいことの例を挙げて、人間の言葉がコンピューターで使われる言語とは違う性格のものであることを説明している。

さらに自然言語が人工的なコンピューターと大きく違うことは、両者が同じ解答にたどり着くにしてもその結論にいたる過程は人間とコンピューターでは別であるという点である。石川(2012:39-45)にはある文章とある文章との関係からある答えを導くにあたっての人間の理解はコンピューターが答えを出す手順とは直感的に違うと述べている。

それとは別の問題もある。コンピューターに知識を記述し続けても言葉はどんどんと新しい環境で変化していくためにそのたびに補充していかなければならないので記述し切れないうし、知識は積み重ねにならないことも指摘している。つまり柔軟性の幅が全然違うのである(2012:45-51)。

外界の環境に対する適切な対応を状況に応じて取る柔軟性が生物にはある。それは言語の使用においても同様の柔軟性が求められていて、我々はその柔軟性に対処できるような言葉のあり方を生み出している。一定の体裁を保持しながら自然言語の場合、

言葉が入れ変わったり、文法が変わっていったりして絶えず新陳代謝している。そのメカニズムこそが言語が生物と比較し得る重要な点だと言える。コンピューター言語、あるいは暗号のような人工言語は柔軟性に乏しくちょっとした間違いやつまずきがあると途端に機能しなくなるということが起こり得る。福岡(2007:)にはテレビの部品は一部が壊れるとその部品が担っているところで故障が起きるが人間の体は一部がなくなってもそれを補うシステムが備わっている例を挙げて人間の体の中で起きていることと機械のそれとの違いを指摘している。ある臓器で多くの割合を占めているものがない状態のノックアウトマウスを誕生させ成長させても正常なマウスと何ら変わらないという現実を見た経験から、人工的な機械との決定的な差を指摘している。コンピューターにはトラブルが起きてもそれをフォローするバックアップシステムがあるが、生物も同様のシステムを持っている。このような臨機応変な性質を時に持ち合わせていることこそが自然言語と生物の共通点なのである。

3 言語間での音声による違い

この章ではこれまでとは違った視点から言語と生物における類似点を指摘したい。言語に関して脳の活性化される部位(したがって言語そのものではなく言語を操っている部分という点での内容になる)と体内時計という内容なので厳密には言語と生理的特徴との比較ということになる。

冒頭で言語によって音素の成り立ちが違うため(語を発音する際のしくみが違っているため)に働く脳の部位も違いのあることが確かめられていることに少し触れたが、その内容を紹介したい。中田力(立花2004:200)は英語を母国語とする人間と、日本語を母国語とする人間では、言葉を黙読するとき活性化される(脳の)部位が著しくちがう実験を

確認している。英語を第一言語とする者10人、日本語を第一言語とする者10人を集め、言語処理に関して実験を行ったところ、人種、民族、生まれなどには一切関係がなく、もっぱら第一言語として何を習得したかによって脳のどの部位が活性化されるかが決まってくるという実験結果を公表している(2004:202)。最初の言語を習得するとき、その人の脳の言語処理のフォーマットができあがってしまって、後から別の言語を習得するときも同じフォーマットを使うようになると述べている。

これは日本人がrとlの発音が区別できないとか、thの発音ができないといった、民族共通の英語の欠陥があることから理解できると中田の実験結果から立花は述べているが、これについて立花は英語では個々のアルファベットを素早く読んでそれをシラブルにまとめるという作業をやらなければならないため英語では日本で使われない特定の部位が活性化されなければならないからであるという。英語は文字素(アルファベット)が音素(シラブル)ではないのでそういう作業が必要になるが、日本語のカナは、文字素がそのまま音素になっているので、そういう作業は必要ではなく、その部位は発達しなかった(2004:203)からである。

このことから同じ自然言語と言っても、少なくとも語の発音という点においては同じ脳の部位だけが活性化されているわけではないことがわかる。語の特徴によって別の言語の語の発音以上の負担がかかるものは別の部位の助けを必要とするということである。

文法がそれぞれ固有の特徴を持つことは言語の構造の点からも同様である。その前提から言えば、文法面においても異なったメカニズムで成り立っているのであれば、脳の別の部位がかかわっている可能性も出てくる。その実験はこの時点では行われていないが、仮に同じ部位が反応するとしてもそこで処理されるあり方も同じとは限らない可能性がある。

同じ部位が別の役割を果たす(したがって複数の役割を担う)場合もある。音楽と言語は同じ部位で処理されていることが指摘されているからである。

絶対音感を持った人はどんな音を聞いても音階名で認識でき、これが言語能力に近いことも指摘されているが、絶対音感者に音符を示すと、文字(ひらがな)を提示したときと同じ脳の部位(側頭平面)が活性化される(2004:208)。音楽においても音声言語的理解(聞いてわかる)と書字言語的理解(文字記号=音符を見て理解する)が同じ部位で出会い、言語能力と音楽能力は基本的に同じ脳の部位が担っていることが示されている、としているが(2004:208)、音楽と言語が実際の日常で果たす役割は性質的に違っているものであるから、同じところが活性化しているということは逆に同じ脳の部位で違ったことを処理していると言えるのである。音楽には言語の格に当たるようなものがないからである。複数の処理が行われるということは、決して普遍的な文法が存在しているわけでも、すべての言語を司っている一つのメカニズムがあるわけでもないと考えてもおかしくはない。

人間が語を発音するという点に関して言えば、必ずしも同じ脳の部位が働いているわけではない。現在のところ(少なくとも以上参照した実験の時点では)、それは語の発音という点で言えるわけだが、言語以外のことに少し目を向けて考えてみると一見同じように見える、共通して生物に見られることも、同じ部位がその役割を果たしているとは限らない。それはいくつかの例から明らかになっている。たとえばふぐは猛毒性物質を持っているが、ふぐの種類によって存在する部位が異なり、季節によって毒の強さが異なることも分かっている(1995:129)。ある種のふぐには卵巣と肝臓に毒があり、違う種類のふぐには皮に毒がある。さらにどんな生物にも体の中に体内時計というものを備えているが、それを担当している脳の部位は生物によってさまざまなので

ある。

生物は体の中に活動する時間帯と休息する時間帯を決めるしくみを備えている。単に明るくなったからとか暗くなったからということだけで活動する時間が決まるわけではない。体内に時刻を刻む時計があることで活動時間が決められるのである。これを証明したのはドイツのカール・フォン・フリッシュというミツバチの行動生理学者の弟子のベリングという人である。光、温度、湿度を一定に保った実験ではミツバチの行動は変わらないが、大西洋を越える移動実験から最初に学習させた土地の時刻に合わせて行動することを観察して外からの要因を取り除いても時刻学習が成立することから、体の中に時計が存在することを突き止めた(2000. 6-8)。生物の体の中であって、およそ一日で一回りする生物時計は「概日時計」と呼ばれているが、概日時計は完全に一定で環境がまったく変化しない条件におかれても一定の期間で繰り返す周期性を示す(2000. 8)。ところがどの生物にもあるこの生得的なメカニズムは必ずしも脳の同じ部位にあるわけではない。この概日時計が体内のどこにあるか、その位置が初めて明らかにされたのはゴキブリで(2000. 36)昆虫の脳が複眼につながっている「視葉」と「脳葉」のどちらにあるかが実験でわかっている。結果としてゴキブリの場合、視葉に概日時計があり、別の実験ではフタホシコオロギという昆虫にも視葉に概日時計があることが確認された。しかしアメリカのJ. W. トルーマンはガの羽化のリズムを支配する概日時計とそれに入力される光受器の両方が脳の視葉ではなく脳葉の部分にあることを証明した。しかもセクロピアサンというガとサクサンというガは同じ種類でありながら別々の部位であることが判明している。体内時計というさまざまな生物に見られる共通した特徴が、異なった脳の部位で操られているのである。

たとえ音声という側面であっても言語を操る脳の部位が言語によって違っていること、一方で音楽と

言語という、基本的に違ったことが同じところで処理されているというところから、どの言語にも母語話者ならば働く言語的直感があるとしても共通した脳の部位で働いているとは限らないと推測できる。そこから考えられることは脳の同じ部位にもさまざまな働きがあり、違う機能を担い得る機能があること、逆に違う部位であっても、別の部位と同じような役割を果たす可能性のあることが指摘できる。それは福岡が指摘した、ある重要と思われるタンパク質を取り去ったノックアウトマウスが正常なマウスと何ら変わらない状態でいられることと性質として関連があるように思われる。もちろんある程度までどこで何を担っているかは脳の部位によって決まっていることは確かである。しかし生物の場合違う部位であっても関連ある部位がある意味代わりをして同じような機能を果たしたり、補ったりする。たとえば失明した人がそれ以外の五感の感覚が鋭くなってまわりの環境に対するとらえ方が鋭敏になることもその一つであろう。言語に関係しているさまざまな脳の部位もいろいろな機能を担い得るのではないか。そして通常は一つの部位がある機能を担いはしているが潜在的にそれ以外の部位も同じような性質を持っていると言えるのではないかと推測できる。

4 言語が生物と比較し得る性質について

最後に言語と生物が類似している最大の点は何かと考えた場合、それは絶えず代謝を繰り返す、中身は入れ替わりながらも同一体を保っているダイナミックなあり方にあると思われる。すなわちそこには固定的な側面を強固に保持しながらも絶えず変化しているという姿である。たとえば人間はある年齢に達するまでは個体を保持しながらも維持と同時に成長という変化もある。言語も新しい語が入ってくる一方で、使われなくなる語も出てきて頻繁な語の入れ替わりを筆頭に、表現自体も変化している。そ

ここには人間の意志による導入や取捨選択もあるが、無意識な部分もある。そして言語の変化の方向を引き起こすのは実は意識的な部分よりも無意識な部分、特に「例外的なあり方」が絡んでいると考えられるのである。

認知言語学という枠組みの中で言語分析をすると、英語の場合問題となるのは意味と形の不一致、ずれ、すなわち「例外的なあり方」がなぜ存在しているかという点であった。言語形式には程度の差こそあれ、人間の認識のあり方が反映されており、形式は理由なくその形をしているのではない。意味と形は切り離せない表裏一体の関係にあり、言語形式には意味が反映されているという考えに立つ。英語で同じ形式で表される文章やいくつかの句の例の間には何らかの共通した意味特徴が見られることから言語が今ある形式をとっているのは決して偶然によるものではない、そこには何らかの理由があるという考え方である。高校までの授業で我々は第三文型と第四文型との書き換えを習ったが、実際には微妙な意味の差がある。第四文型に見られる例文には動詞の意味合いが間接目的語に対しては強い、影響力が大きいという共通の特徴が（すべてとは言えないが多くの場合）実際に見受けられる。そこから意味と形式の関係があると言えるわけであるが、しかしそういった立場では説明できない反する例、矛盾した例が出てくるのも事実である。

この問題に対しどのような立場を取るかは人それぞれであろうが、言葉というものはどの言葉にしても単語や文法、発音を含め、常に変わってきたという事実を考えれば例外というのは常に存在するのが自然であるように思う。一定の体裁を取り、安定した言語の位置を占めながら、一方で常に変化してきたという歴史があるからである。もし完全に完結しているならほとんど変わることなく発展しなかったのではないか。言語が生物にたとえることのできる大きな特徴は最初に述べたようにそのダイナミック

さにあると言える。その例を考えてみたい。

形式と意味のずれにはいくつかのパターンが考えられる。目的語を取るのは基本的に他動詞であるがsureのような形容詞もthat節を取ることから（疑似目的語と呼ばれる）これも意味と形式がずれた例であると言える。疑問文が必ずしも相手に聞く、尋ねる疑問の意味にならず、時には命令の意味であったり、依頼の意味で使われることがあるのもまたそういった例である（たとえば英語のCould you pass me the salt?のような表現）。さらに命令文も必ず命令の意味になるとは限らない。内容が相手の利益になるようなものは命令の意味にならないからである。（日本語で「おやすみなさい」という場合、普通命令の意味で使われることはない）

意味と形式のずれの別の例では、先ほど第三文型から第四文型に書き換えられた場合、動詞の意味内容が一定の影響を間接目的語に及ぼすと述べたが、これもすべての場合ではない。たとえばgiveという動詞は大して意味に変化をもたらさない。もともと書き換えても影響が及ばないような意味を持つ動詞の場合、形式がどうであれ意味に関与しようがないからであろう。

このようなことは形式と意味の間にどこかで必ず生じてしまう。それは語一つ一つでそれぞれ意味が異なっているからである。世の中のものやものを区分してもきちんとした区分けができるわけではない。必ず中心的な位置を占めるもの、そうではないものが出てくる。もともと自然界に存在するものは我々のカテゴリー化を意識して出てきたわけではないからである。したがってそれを言葉にしたものも当然その影響がある。

認知言語学の分析の手法、考え方という側面からだけ見れば、以上のような例外は不都合かも知れない。しかし言語の創造性という点から見れば、命令の形を取りながら依頼の意味を表したりする用法に広がっていく（すなわち意味と形式の分離が起こ

る) からこそ、同じような意味内容を伝える手段が複数存在し得るのであるし、選択できるメリットにつながり、それが表現の多様性に貢献する。言語はコミュニケーションの手段として人間にとってよりよい方向に向かう性質を備えているはずである。それは生物が自らの存在を環境に対して有利に進めるのと同様、都合がよいからである。人間の生み出した言語がどんな言語であれ、コンピューターのような単なる論理的な存在で終わっていないのは生物と同様、こういった性質を持っているからだということはこれまでの章でも述べた。形式と意味の関係のみを問題にするのは言語を分析する人間の勝手ではない。

言語が変化し続けてきたのはさまざまな言語で古文にあたる歴史的な文献が残っていることから明らかであるが、ダイナミックに変化していった痕は現在使われている用法にもその名残りをうかがうことができる。受動態である動詞が使われ常態化してしまうと過去分詞形が形容詞的なものとしてとらえ直され形容詞の用法として定着するのもその一つである。わかりやすいもっと別の例ならば英語のthatが挙げられよう。定冠詞のtheは指示代名詞のthatから発達しているし、接続詞のthatも本来は指示代名詞のthatから発達してきている(1995:107)。以下の例を見るとthatが品詞は違っても同じものから別の用法に変化していったことは想像できる。

以下の1から5までの指示代名詞(名詞として使われている場合と形容詞的な用法の場合)、接続詞、同格のthat、副詞はそれぞれ意味にゆるやかなつながりがあると感じられるはずである。

- 1 That is a pen.
- 2 That book is mine.
- 3 The forecast says that it's going to rain.
- 4 I know the fact that he stole money from his friend.
- 5 It is not that good.

1は2とthisに対応する意味との関連から使われているという点で共通性が感じられるし、3の接続詞のthatは省略できると我々は高校の英語の授業で習うが、ある場合とない場合では実際はニュアンスが異なる。池上(1995:105-107)によるとthat以下の内容が既に話題として会話の中で出ている場合は接続詞thatを伴い、話題として出ていない新出の場合は伴わない。定冠詞のtheがthatから発達したものだとは先ほど書いたが、本来話題として既出のものを指す役割の時に使われる定冠詞が接続詞の場合にも意味的に反映されていることからつながりを感じられる。また4の同格を表すthatはすぐには指示代名詞との共通性がわかりにくいかも知れないがthat isが「すなわち」という同格の意味で使われることからやはり関連性やゆるやかな連続性を感じることができるはずである。

今述べたことはあくまで共時的な見方で、実際の歴史的な派生のあり方と一致するかどうかはともかく、品詞がさまざまに変化していくことから言語がダイナミックな面を持っており、何度も言うように、人工的に決められたような融通のきかない性質のものではない。一つの品詞という枠に留まるのではなく、新しい語の創出、用法の拡大にまで広がる可能性を常に持ち合わせているのである。品詞が変わるということは、構成している文の中で新しい役割を果たすということでもあるから当然そこには文法規則の対応関係の複雑さが生まれる。その一つがsureのような形容詞は本来目的語を取らないはずであるのにthat節を続けることができる例である。したがって形式と意味のずれはどこかで常に起こっており、それが解消されない方が普通なのである。さらに変化が起こっていけば例外が何らかのときに反応し、新しい変化(用法)を導くきっかけを与える可能性も出て来るのである。人間が自らが作ったわけではない自然界のものを区別する場合に必ず例外が出るように自然言語におけるカテゴリー化の間

題は自然なことなのである。

言語の成り立ちという点を考えてみても、文や句の場合、最初から形式が意味を担っているわけではないし確立されているわけでもない。たとえば英語の所有構文は最初からA's Bと B of Aの二つの形に分かれていたわけではない。なぜ用法が分かれたのかはわからないが、何らかのきっかけが引き金となって二つの形式があったほうが有意味だということになったのであろう。能動態と受動態、第三文型と第四文型のそれぞれ二つの表わし方があったほうが言葉の意味を伝えるにおいてよりよいということから定着したのと同じ原理のはずである。言葉は絶えず変化し続けていくため、新しい形式が生まれたばかりの時期は対応する形式との間にはっきりそれぞれの役割が決まらず、意味と形式の対応関係は混沌とした状況が長い間続いたはずである。(そして習慣化した言いまわしは意味と形式の関係が築かれた後も固定化したことが予想される。だからこそA's Bの用法で今では消失している同格の表現のいくつかが今でも残っているのであろう。) ある時期には意味と形式の対応関係がうまくマッチする方向に向かい、例外を常に残しながらも定着するのである。多くの場合、言語は独自の意味合いを確立するように存在しようとするからである。(単語を例にとるとわかりやすいが父上、父さん、とうちゃんは文体的な違いから使われる場面が異なる。それぞれの意味する範囲に棲み分けが生じるのである。能動

態と受動態では両方の形式で表すことが可能な場合も多々あるが、能動態でしか表現できない内容、受動態でしか表現できない例があるし、両方で表現できる内容も文の流れから自ずとどちらが適切な表現かが決まってくる。) 知的意味の違いから文体における違いまで、必ず何らかの点で異なっているのである。

したがって認知言語学で問題となる意味と形式のずれは生物がある時期に変化していくという性質を常に潜在的に持っているという観点から見れば自然なことと思われるのである。

まとめ

言語が生物と似ている点は効率的で常に変化しているという点から述べたが、いずれにおいても必ずしも無駄がないというわけではない。人間のDNAには無駄なものも多いようであるが(というより何の役に立っているのかが今の所の研究段階においてははっきりしないということであろう) 言葉も上で述べたように男性名詞、女性名詞等、意味の伝達という点だけから見ると大きな役割を果たしていないと思われるものが残っている言語も多い。なぜ淘汰されなかったのか、それを見出すことでさらなる言語と生物の接点が見えてくると考えることができる。

注

- 1) 白木(2009:28-33)に『イスとイヌの見分け方』(きたやまようこ)の紹介があり、両者の相似点と違いが書かれてある。単なる表面上の類似ならば意味がない。生物がテレビの部品と同様一つの部品を変えるだけで機能しているのではないと、生物と無生物の決定的な違いを述べていることとよく似た主張だと言える。

参考文献

池上嘉彦(1995)『英文法を考える』ちくま文芸文庫

- 石川幹人（2012）『人間とはどういう生物か』ちくま新書
沼田英治（2000）『生きものは昼夜をよむ』岩波ジュニア新書
今井邦彦編（1985）『英語変形文法 英語学コース3』大修館
白木賢太郎（2009）『生命の謎は「タンパク質」で読み解ける』メディアファクトリー
立花隆（2004）『脳とビッグバン』朝日文庫
福岡伸一（2007）『生物と無生物のあいだ』講談社新書
幕内秀夫（1995）『粗食のすすめ』新潮文庫
美宅成樹（2002）『分子生物学入門』岩波新書
スタンレー・コレン（2002）『犬語の話し方』文春文庫